

2018年4月1日 イースター礼拝メッセージ

聖書:ルカの福音書24章13~35節 (新改訳2017)

説教:ほんとうに主はよみがえられた

はじめに

今日は皆さんとイースターをお祝いしております。日本語では、「復活祭」と訳されています。イエス・キリストが死から復活されたことを覚えてお祝いするという事です。しかし、死んだ人がよみがえったと言えば、普通はどう思うでしょうか。「映画ではよくある話だけれど」、「どうせ神話でしょう」、「そんな反応が返ってきそうです。あるいは、「医師から死亡宣告を受けた人が、希に生き返ることもあるそうだから、そのことではないのか」と、科学的な説明をする人もいるでしょう。しかし聖書は、そのようなことではなくて、完全に死んだ方が死からよみがえられたのだとはっきりと主張します。

今日開いている所には、二人の弟子とよみがえられたイエスがどのようにして出会っていったのかが描かれています。彼らはどんなやりとりをしたのか。そして、このことが今の私たちにどんな関わりがあるのか。ともに見て参ります。

1 エマオへの途上

1) 望みをかけていたのに

場面は、二人の弟子たちがエルサレムから少し離れたところにあるエマオという村に向かう途中、見知らぬ男が近づいてきてこんなふうを尋ねるところから始まります。「歩きながら語り合っているその話しは何のことですか。」

あれほどの大きな事件のことを知らないのですか、と半ばあきれながら二人は、ナザレのイエスと言う男の身に起きた出来事を話し始めます。この方は、話すことばもそうだったけれど、語ったとおりの生き方をするすばらしい人であった。私たちは、この方がローマ帝国によって支配されているこの国を必ず解放してくださると信じていた。ところが、ユダヤ教の祭司長や主だった人たちがイエスを妬み、いいがかりをつけて逮捕したあげく、死刑にして殺してしまった。それが三日前に金曜日のことだった。

2) 墓の中からからだが見当たらない

ところが三日経った今日の朝、女たちが墓に行ってみると墓の中は空っぽだった。ほかの弟子たちも確認したが、やはりからだが見当たらない。誰かが盗んでいったのだろうか。期待をかけていた

先生が殺されたこともそうですが、からだ盗まれてしまったこと。この二つのことが重なり、二人の弟子たちは、すっかり落ち込んでいたのです。

2 イエス

1) 旧約聖書から解き明かす

そこへ、当の本人であるイエスが現れます。すぐに、「わたしはよみがえったイエスです」と言えばよいものをなぜかそのことは黙っていて、何も知らない顔をし、ひと通り二人の話を聞いてからイエスはこう語る。25節。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことをすべてを信じられない者たち。」

こういうのを「人が悪い」と言います。落語か漫才か、笑い話に出て来るようなストーリーです。もちろん人が悪いわけがないのでなにか理由があるはず。それはまた最後のところで触れます。

続いて27節を見ます。「それから、イエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに解き明かされた。」

その解き明かし方があまりにも熱心だったのでしよう。目的の村に着いたのにどンドン先に歩いて行って、話が止まらない様子なのです。でも太陽が沈みかけて辺りは暗くなってきました。二人は見知らぬ男に「是非いっしょにお泊まりください」とお願いをし、宿に泊まることにしました。

2) パンを裂いたとき

そうして夕食の時間になりました。見知らぬ男がパンを取って神をほめたたえ、それを裂いて渡した時のことです。二人の目が開かれ、その瞬間初めて目の前に座っているのはイエスだとわかりました。

ここも不思議なところですが、少なくとも二つの疑問がわいてくる。弟子たちはずっとイエスといっしょに生活してきたのです。それなのにどうしてそれまでイエスだとわからなかったのか。顔も体つきも、自分たちが知っていたイエスと異なっていたのか。あるいは霊的な目が閉じられていたということかもしれません。聖書に書かれていないので、私も答えられません。

もう一つの疑問がある。先ほどまで全然分からなかったのに、どうしてパンを裂いたときにイエス

だと分かったのか。この疑問には答えることができます。二つ理由があります。

まず一つ目の理由。イエスがパンを裂く場面は聖書に何度か出てきます。実はつい数日前、それは木曜日の夜のことで、そのときもイエスはパンを裂いていました。その場面が書かれているルカの福音書22章19節を読みます。「それからパンを取り、感謝をささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからです。わたしを覚えて、これを行いなさい。』」

この食事が終わって間もなく、イエスは逮捕され、十字架におかかりになります。パンを裂き、祈る感謝のことば、パンを渡すそのしぐさ、弟子たちはまだ生々しく覚えている。あのときとそっくり。それを思い出して、「あっ、この方はイエスだ」とわかった。

そしてもう一つ理由。食卓に置かれたパンをイエスが取ろうとしたとき、何が見えたと思いますか。もちろんイエスの手が見えます。その手を見たとき、息をのみました。手には釘の跡があったからです。十字架にかけられたときの釘の跡です。なぜ墓が空っぽになっていたか、今分かりました。この方は死からよみがえられた。不思議なことですが、そのことが分かった瞬間、イエスの姿が見えなくなりました。

3 本当に主はよみがえった

1) 心は燃えていた

二人はすぐさま、ほかの弟子たちに報告するためにエルサレムに引き返します。その道でまた二人はいろいろと語り合います。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を解き明かしてくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」

あのとき、弟子たちはどん底に突き落とされ、目の前が真っ暗になっていました。心が内で燃えるなどありようがない。けれども、イエスが旧約聖書を開き、「モーセや預言者たちは、キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、栄光に入る」と書いていることを解き明かしてくださっていたとき、今振り返って思い返すと、心の火が燃えさかっていた。

極端なことを言えば、イエスは聖書のエッセンスは二つだと教えています。一つは、「キリストは必ずそのような苦しみを受ける。」いったいなぜ神の子が殺されなければならないのか。私たちが神に罪を犯したらからです。どこでそれがわかるのか。皮肉なことですが、神の子イエスを十字架に

つけた。それが証明です。誰もが言うでしょう。「私は関係ない。」いいえ、関係あります。人を憎み、さげすみ、盗み、自分の都合の悪いことは隠し、嘘をつき、神を神とも思わず自分のことしか考えない。そのような者は全員、神の子を十字架につけたのだと聖書は言います。

もしそこで終わりなら望みはありません。しかし二つ目がある。「それから、その栄光に入る。」「栄光に入る」とは何か。死んだ方が死からよみがえりということ。イエスの十字架の死とよみがえりを信じる者は、罪から救われ、死ぬいのちではなく、永遠のいのちをいただくことができる。これが聖書の初めから最後まで貫き通されている教えです。このことをまさにその本人であるイエスが目の前に立って解き明かしてくださいました。

2) 本当に主はよみがえった

先ほど、どうしてイエスは弟子たちに自分のことを「わたしだ」と教えなかったのか。それが不思議だと言いました。答えはシンプルです。たとえそうしたとしても絶対に信じないからです。「嘘だろう」で終わりです。ときどき「証拠を見せたら信じて上げる」と言うかたがいますが、おそらく本人のイエスが現れても信じないでしょう。それほど私たちは、愚か者で、心が鈍いのです。

ではどうすればよいか。今日の箇所を見てください。この二人は、どのようにしてよみがえりを信じるようになったか。一生懸命勉強したのか。そうではない。全然わからないと頭を抱えていたとき、イエスのほうから近づいて来たのです。近づいて来たばかりでなく、なおまだ理解できていない二人と一緒に歩きながら、聖書をのみことば解き明かしてくださる。そのようにして、冷たくなっている私たちの心にもう一度熱い火を燃やしてください。それだけではない。「このパンを食べなさい」と、釘で打たれた手でパンを分け与えてくださる。よみがえったイエスだと分かった瞬間、この方は見えなくなります。イエスは、「見ないで信じる人は幸いです」と言われましたが、まさにそのとおりなのです。

神という方はどこまで私たちのことを愛し、私たちのために心を砕いてくださるのかと思います。よみがえりの主を仰ぎ見たいと願います。